

# 流通科学部における高大接続探究学習の試み

## Attempt of Inquiry Learning and Transition Education

中村学園大学 流通科学部

浅岡由美・坂本健成・土井貴之・高橋絵梨花

### 1. はじめに

初等中等教育と高等教育との接続を表す象徴的な用語として「高大接続」が使われている。

我が国におけるその端緒は戦前にまで遡るとされ、当時は旧制中高接続政策における高等教育入試制度づくりを課題として、いわゆる入試改革（旧制中高接続）が議論の中心であった〔1〕。

文部科学省は、平成11（1999）年12月の中央教育審議会答申「初等中等教育と高等教育との接続の改善について」において、高大連携の推進の姿勢を初めて明確に打ち出した〔2〕。答申の第4章では「初等中等教育と高等教育との接続の改善のための連携の在り方<sup>1</sup>」が述べられ、具体的な教育上の連携方策として、①高等教育を受けるのに十分な能力と意欲を有する高等学校の生徒が大学レベルの教育を履修する機会の拡大方策、②大学がその求める学生像や教育内容等の情報を的確に周知するための方策、③高等学校における生徒の能力・適性・意欲・関心等に応じた進路指導や学習指導の充実、などが示された〔3〕。②に関連し、大学には入学者受け入れ方針（アドミッションポリシー）をはじめ、的確な情報公開と積極的な情報提供が求められるようになった。

この答申以後、大学教員による高等学校での出張講義・出前講義や大学のオープン・キャンパスでの模擬講義など、進路・進学指導の延長線上にあった従来の「連携」型の取組に加え、教育の「接続」を意識した「高大接続」の取組

が見られるようになった。例えば、大学での通常の授業に高校生が科目等履修生として参加したりその学習成果を高等学校の単位として認定したり、大学での実験などに高校生が参加し個別指導を受けたりするなどである。「高大接続」の経緯は次章で詳述するが、秋田大学によれば、近年の「高大接続」では、高等学校の教諭と大学の教員が協力して、教育内容の連続性や接続性を意識しながら、高校生、大学生の育成に携わる形態が増加しつつある〔4〕。

「探究学習」についても次章で導入経緯を述べるが、高等学校の探究学習に大学が専門的な立場から、あるいは「高大接続」の観点から深く関与する動きが見られるようになっている〔5〕。

大学教育は、小・中・高等学校教育で育まれた生徒の力を適正に測り、受け継ぐ「トランジション」機能と、その力をさらに伸ばし大学生を社会に送り出す「人材育成」機能という重要な役割を担っていると言える。そこで本稿では、流通科学部における令和3（2021）年度に実施された「高大接続」の取組を報告するとともに、上記2つの機能について現状と課題を整理し、可能性を考察しながら今後の展望を示すことを目的とする。なお、この取組は中村学園大学プロジェクト研究<sup>2</sup>の助成を受けている。

### 2. 高大接続と探究学習の導入経緯

「高大接続」の議論は、平成24（2012）年に文部科学大臣から中央教育審議会に対し諮問が

行われ、高大接続特別部会が設置されたことから本格化した。平成25（2013）年10月の教育再生実行会議の「高等学校教育と大学教育との接続・大学入学者選抜の在り方について」の提出を経て、平成26（2014）年12月、中央教育審議会は「新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体的改革について～すべての若者が夢や目標を芽吹かせ、未来に花開かせるために～」を答申した〔6〕。この答申は、教育改革最大の課題でありながら実現が困難であった「高大接続」改革をはじめて現実のものとするための方策として、タイトルどおりに「高等学校教育」「大学教育」及び両者を接続する「大学入学者選抜」の抜本的改革を提言するものであった〔7〕。

高等学校教育は、1990年代前半頃までの「知識詰め込み型」教育からゆとりある充実した学校生活のための「思考力」や「(受け身から) 能動的学習」を育む教育への移行を課題として捉えていた。また、平成15（2003）年のいわゆるPISAショックの影響もあり、文部科学省は「ゆとり」か「詰め込み」かの二項対立的な議論を回収する形で平成19（2007）年に「基礎的・基本的な知識・技能」「思考力・判断力・表現力等の能力」「主体的に学習に取り組む態度」という「学力の3要素」を示した。この頃から学力の3要素を育成する必要性の議論が展開され、大学教育においては、生徒が高等学校までに培った力を引き継ぎ、かつ、更に向上・発展させ、学生を社会に送り出すことが求められたことから、大学入学者選抜では、学力の3要素を多面的・総合的に評価する必要があると考えられるようになっていった〔6〕。

一方、「総合的な学習（探究）の時間」設置の経緯が示された文部科学省の教育課程部会〔8〕によれば、平成8（1996）年7月の中央教育審議会「21世紀を展望した我が国の教育の在り方について」（第一次答申）において、こ

れからの子供たちに必要となる資質や能力が、変化の激しいこれからの社会を〔生きる力〕として示され〔9〕<sup>3</sup>、次いで、平成10（1998）年7月の教育課程審議会答申において「総合的な学習の時間」の創設が提言され〔10〕、平成11（1999）年3月の「高等学校学習指導要領」では「総合的な学習の時間」の設置が告示された〔11〕。

平成20（2008）年1月の中央教育審議会答申「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について」では、総合的な学習の必要性と重要性が再確認され〔12〕、平成28（2016）年12月の中央教育審議会答申「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について」において「高等学校の総合的な学習の時間を、小・中学校の成果を踏まえつつ、自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら、生涯にわたって探究する能力を育むための総仕上げとして位置付け、名称を“総合的な探究の時間”とし、主体的に探究することを支援する教材の導入も検討する」とし、「探究」という言葉が初めて明示された〔13〕。

これを受けて、平成30（2018）年3月の「高等学校学習指導要領」では「総合的な探究の時間」が設けられた<sup>4</sup>〔14〕。ここでは、探究を「物事の本質を自己との関わりで探り見極めようとする一連の知的営みのこと」とし、探究における生徒の学習の姿を図1が示すように「①日常生活や社会に目を向けた時に湧き上がってくる疑問や関心に基づいて、自ら課題を見つけ、②そこにある具体的な問題について情報を収集し、③その情報を整理・分析したり、知識や技能に結び付けたり、考えを出し合ったりしながら問題の解決に取り組み、④明らかになった考えや意見などをまとめ・表現し、そこからまた新たな課題を見つけ、更なる問題の解決を始めるといった学習活動を発展的に繰り返していく」とした〔15〕。

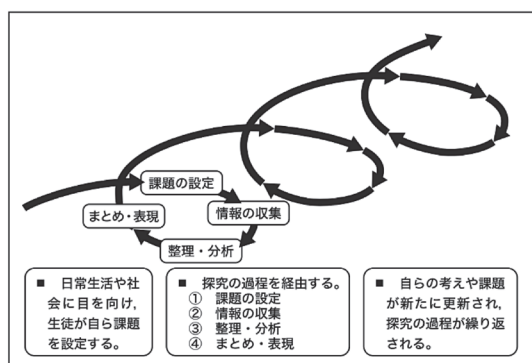


図1 探究における生徒の学習の姿  
(文部科学省 (2018) [15])

### 3. 取組事例

本稿では、流通科学部における3件（以下、単に(1)～(3)と記す）の高大接続の取組について報告する。(1)と(2)は、中村学園大学入試広報部が主催した「高大接続探究学習ワークショップ」における取組である。このワークショップは、大学生と高校生がともに学び、様々な課題を発見し、考察・発表することで、問題解決能力・自己表現力を育成することを目的としている。各学部が担当し、流通科学部では「ビジネスをUPDATE」という学部の特色を活かしたテーマを掲げ、令和3（2021）年度に2つのワークショップを担当した。新型コロナウイルス感染症対策を講じたうえで、事前に予約を行った高校生が本学に来校し参加した。

(3)は、坂本と浅岡が国土交通省九州運輸局から受託した「地方の鉄道路線の活性化に向けた調査業務」において、両ゼミの大学生と鹿児島県内の高校生が協力して鹿児島市、指宿市で調査を実施し、調査結果についても議論を行う取組である。なお、議論は令和4（2022）年3月に九州運輸局の担当者、高校生、大学生をZoomなどのオンラインで結び、開催を予定しているため本稿では、終了した鹿児島市、指宿市での調査について報告を行う。

#### (1) コンビニの経営戦略から、企業の「今」を考える

土井と高橋が担当したこのワークショップは、令和3（2021）年3月末に入試広報部から企画の依頼を受け、同年6月20日に実施予定であった。しかし、新型コロナウイルスの感染拡大にともない、準備も実施も計画どおりに進まず、新型コロナウイルス感染者数が減少傾向となった同年7月11日に開催した。

テーマは入試広報部とのミーティングを経て、コンビニエンスストア（以下、コンビニ）に設定した。大学生と高校生が身近に感じられるコンビニを対象に、課題の発見とその解決方法を話し合うことで、課題解決能力を身につけられると考えた。実施内容とねらいは次の3つである。①有価証券報告書やアニュアルレポート（統合報告書）を用いた情報収集能力を土井が担当した。有価証券報告書やアニュアルレポートには企業の財務情報や非財務情報が集約されており、コンビニ各社の経営成績や財政状態、直面している問題や将来の展望などを調べる。②SWOT分析による考察力を高橋が担当した。SWOT分析とは、Strength（強み）、Weakness（弱み）、Opportunity（機会）、Threat（脅威）の頭文字から構成される手法で、企業の外部環境と内部環境を把握・分析し、戦略の立案や意思決定を行うフレームワークを体験する。③ポスター作成・発表をとおした表現力を大学生（土井ゼミ3年生）が担当した。高校生がお互いの意見を話し合うだけでなく、大学生が学んできた知識からヒントを提供することで、高校生と大学生のグループワークをとおしてコミュニケーション能力を身につけられる。

事前準備として土井はゼミ生に対してMicrosoft Teamsによるリモート授業で、有価証券報告書やアニュアルレポートの読み方を説明した後、気になる企業の有価証券報告書やアニュアルレポートの内容を発表させた。対面授業が可能となった時期に、ワークショップの

リハーサルとして、土井によるコンビニ各社の有価証券報告書やアニュアルレポートの説明、高橋によるホンダのSWOT分析、ゼミ生によるグループワークとポスター発表を行った。そして、ワークショップ参加のゼミ生には、コンビニ大手三社（株式会社セブン・イレブン・ジャパン、株式会社ファミリーマート、株式会社ローソン）の有価証券報告書やアニュアルレポートの内容を再確認し、高校生に説明できるように準備させた。

ワークショップ当日、福岡県、大分県、宮崎県などから高校生24名<sup>5</sup>、高校生のサポート役として大学生（土井ゼミ3年生）8名が参加した。なお、各グループのメンバーが初対面となるように（所属高等学校が重ならないように）配慮を行った。当日のスケジュールは表1のとおりである。

作業開始後の高校生同士の会話は少なく、手が止まる者も見受けられた。しかし、各グループに配置された大学生が丁寧にサポートを行ったことで、徐々に高校生同士に会話が生じ、活発な議論へと発展した。議論が行き詰まったグループにおいても、大学生が高校生と共に考えながらアドバイスを行う様子が見て取れ、高校生に寄り添ったサポートが実現された。

ポスター発表は、順番にグループごとで行い、発表者は単独でも複数人でも可とした。いずれのグループも、事前に土井ゼミで実施した発表とは全く異なる内容のプレゼンテーションがな



図2 グループワーク（SWOT分析）の様子<sup>6</sup>

された。大学生によると、想定を超える高度な意見発信も行われたとのことであり、質の高い分析を展開したグループもみられた。

最後に、土井が総括を行い、アンケート調査を実施した。24名から回答が得られ、23件が「満足」、2件が「やや満足」であった<sup>7</sup>。また、本ワークショップに参加した目的（複数回答可）について、最も多かった回答は「大学の雰囲気を知るため」（20名）であり、次いで「大学生と交流したいため」（6名）という結果となった<sup>8</sup>。

表1 ワorkshop（7/11）のスケジュール

13:00～13:10	挨拶・自己紹介
13:10～13:50	コンビニの経営を会計の側面から考える（担当：土井）
13:50～13:55	休憩
13:55～14:25	SWOT分析の説明（担当：高橋）と各グループによるコンビニのSWOT分析
14:25～15:05	発表準備
15:05～15:15	休憩
15:15～15:50	発表（各班5分）
15:50～16:00	総括

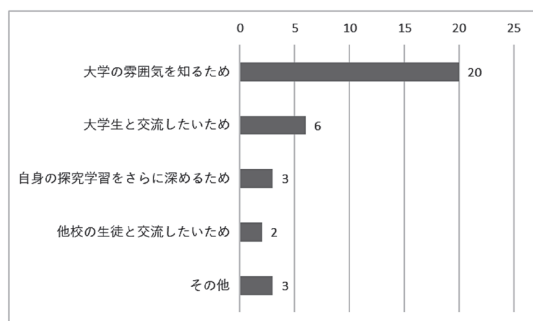


図3 ワークショップ(7/11)の参加目的  
(複数回答可)(単位:名)

感想には、「普段消費者として利用しているコンビニの経営について知り、考えることで視点を増やすことができた」「コンビニの裏側や企画の大変さを知ることができた」「想像していた数倍とても充実していた」「優しい大学生やグループメンバーと協力してSWOT分析をすることにより楽しく流通科学部の授業雰囲気などが学べた」などが挙げられ、総じて好反応であった。

## (2) サービスの分析から、ファストフードの「今」を考える

このワークショップは浅岡が担当し、令和3(2021)年12月5日に実施した。8月末に入試広報部から企画の依頼を受け、サービス・ブループリント<sup>9</sup>というサービスの分析手法を用い、ファストフードのサービスについて考えることにした。ワークショップ開催まで十分な時間があつたことから、浅岡ゼミの3年生(16名)、2年生(11名)が主体的にイベントの企画・運営に関わるように試みた。

浅岡ゼミでは、サービス・マーケティングの理論をふまえ、小売業、観光業、地方自治体などが提供するさまざまなサービスに関連する課題を発見し、改善策を考えたり新しいサービスのデザインを試みたりする。実際のサービスの現場の調査や分析を通じて、理論を応用、実践しながら自ら学習する姿勢を養うことを目標に

掲げている<sup>10</sup>。後学期の初回の授業で、ワークショップの概要を伝え、ゼミ生の意欲を確認したうえで、コンビニエンスストアを事例にサービス・ブループリントについて復習を行った。以後、3年生と2年生が協力してワークショップの準備を行えるように3年ゼミの授業を2年ゼミの開講時間に移した。

役割として、司会担当(2名)、サービスに関する説明担当(2名)、サービス・ブループリントに関する説明担当(2名)のほか、高校生のサポート担当(16名、2名×8グループ)、大学生が考えるサービス・ブループリント作成担当(5名)を設定した。以後、司会担当者はシナリオ原稿を考え、説明担当者は内容を考え、パワーポイントのスライドを作成した。4名×4グループで編成したサポート担当とサービス・ブループリント作成担当は、①ファストフードのサービス・ブループリントを模造紙に作成、②満足・苦情・不満足の原因の探索、③満足度の向上策、苦情・不満足の原因の改善策の検討の3ステップについてグループワークを進めた。それぞれのステップが終了するたびにゼミにおいてプレゼンテーションを行い、各グループが考えた内容について意見交換を行った。サービスなどの説明はワークショップの冒頭で行うが、高校生が理解できるように平易な言葉で手順よく説明することが求められた。司会担当、説明担当は、準備が整ったところでリハーサルを行い、他の大学生からの指摘にもとづき、説明の内容を変更したりスライドのイラストを変更したりする改善のプロセスを3回、繰り返した。また、サービス、サービス・ブループリントの説明のスライド資料に加え、大学や流通科学部、大学生生活の説明資料を全員で作成し、高校生に配付した。

次いで、高校生が実践するために、どこまで準備を行っておくのか、どこをどのようにサポートすればよいのか、必要な文具などについて考え、模造紙やポストイットなどに書き込み

を行うなど準備を行った。当日の目標を「高校生が楽しむ！ 大学生も楽しむ！！」とし、高校生が楽しんで学習できるように、自分たちは何ができるのかを絶えず、考えながら準備を行った。

ワークショップ当日は10:30に集合し、会場設営、最終リハーサルを行った。誘導、受付、後片づけの役割も分担した。高校生をサポートする担当者は、全体に伝えるほうがよい質問を受けた場合などは教員に報告するが、その他の内容はワークショップの進行をコントロールする司会担当に連絡、司会担当が判断することとした。昼食休憩を挟み、12:30から高校生を迎えた。佐賀県、大分県、熊本県、鹿児島県などから33名の高校生が参加し、概ね一つのグループを高校生4名、大学生2名で編成した。当日のスケジュールを表2に示す。

初対面で、始めは緊張した面持ちの高校生であったが、大学生が声を掛け、グループワークの最初の自己紹介、グループの名前をつける、テーマとするファストフードを考えるプロセスで打ち解け、活発な意見交換が始まり、グループワークが進んだ。

選択されたファストフードは、マクドナルド4グループ、モスバーガー1グループ、スターバックス3グループであった。大学生によれば、入店から退店までの顧客の行動やフロントヤードの従業員の言動に関して、大学生が助言する必要はほとんどなく、接客や調理を行う従業員や事務管理などのバックヤードの動きについて

のサポートが中心であった。

ポスター（模造紙）発表では、各グループの高校生を2人ずつ、発表をする者とのグループの発表を聴く者とのに分けた。大学生1名は発表をサポートし、1名は他のグループの発表を聴いた。15分経過したところで発表者と発表を聴く者を交代した。



図4 グループワーク、ポスター発表の様子

最後に、各グループから高校生1名が感想を述べた。「一つ一つのサービスを分析すると、当たり前品の清潔さや挨拶が好感度に影響してい

表2 ワークショップ（12/5）のスケジュール

13:00～13:20	サービス、および、サービス・ブループリントについての説明
13:20～14:20	グループワーク1：自己紹介など、①サービス・ブループリントの作成
14:20～14:35	休憩
14:35～15:15	グループワーク2：②満足・苦情・不満足の原因の探索、③満足度の向上策、苦情・不満足の原因の改善策の検討
15:15～15:45	ポスター発表による質疑応答
15:45～16:00	感想と講評

ることが分かった」「ファストフードには頻繁に行き、顧客の立場でサービスを体験しているが、今回、初めて裏方の仕事まで考えることができた」「多くの人の意見を聴きながら考えを整理することが楽しかった」「大学では、このような学習をするのだと分かった」などが述べられた。大学生代表と浅岡が講評を行った後にワークショップに関するアンケート調査を実施した。33名全員が「楽しかった」、32名が「満足」、1名が「やや満足」と回答した。ワークショップの参加目的について、第1位から第3位までで回答を求めたところ、上位から「本学への興味・関心・雰囲気を知るため」「大学というものへの興味・関心」「進学にあたって、大学や学部選択の参考にするため」など、オープン・キャンパス的な目的が挙げられた。これには、新型コロナウイルス感染対策により、本学を訪れてのオープン・キャンパスが中止となったことの影響が考えられる。次いで、「ビジネス系科目」や「サービスなどへの興味・関心」、「大学生との交流目的」、そして、「探究学習を深めるため」が続いた。

後日、大学生にも感想を求めた。「高校生に説明することで、自分の理解が深まった」「高校生の真剣なまなざしと取組に刺激を受けた」「高校生に伝えることの難しさを感じたが、工

夫しながらコミュニケーションを取った」「アルバイト経験の少ない高校生は、想像から意見を出し、自分たちにはない視点や発想が参考になった」「意見を述べることに慣れている高校生が多く、自分も頑張らないといけないと思った」などが挙げられ、ワークショップが、高校生、大学生の双方にとって、さまざまな学びの場となったことがうかがえた。

### (3) 鹿児島市・指宿市における観光調査

令和3（2021）年10月、国土交通省九州運輸局の「地方の鉄道路線の活性化に向けた調査業務」を坂本、浅岡が受託した。この調査は鹿児島県を訪れた観光客の観光行動を明らかにし、鹿児島県を走る JR 指宿枕崎線の活性化立案の基礎データを得ることを目的とする<sup>11</sup>。鹿児島市と指宿市で調査を実施することから、高大接続探究学習の一環として大学生と高校生が協力して調査を実施することを計画した。

本学の入試広報部から鹿児島市の鹿児島純心女子高等学校、指宿市の鹿児島県立指宿高等学校の紹介を受け、10月中旬に九州運輸局の職員と坂本、浅岡が両校を訪問し、依頼と打ち合わせを行った。高等学校の行事予定を勘案し、11月13日（土）、14日（日）に調査を実施した。

調査は、①観光客に声を掛け調査協力を依頼

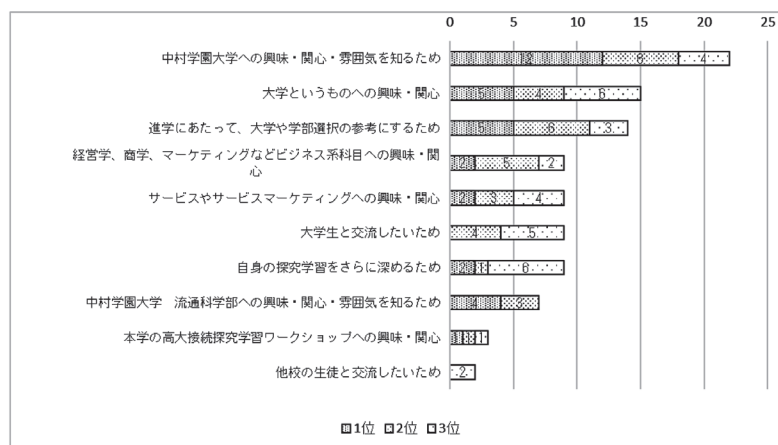


図5 ワークショップ（12/5）への参加目的（単位：名）

する、②観光客は自身のスマートフォンからQRコードを読み取りMicrosoft Formsで設計した調査サイトに移動して回答する、という手順で実施し、時間のない観光客にはQRコードを記した依頼文書を配布して後日の回答を可能とした。調査担当者の大学生11名（鹿児島市は3年生4名、指宿市は3年生5名、2年生2名）と坂本、浅岡の2名は13日（土）の朝、新幹線で鹿児島に向かい、鹿児島市、指宿市で1泊するという行程である。

鹿児島市での調査は、大学生4名と高校生7名が担当した。高校生7名は、高等学校の教員（21世紀型教育推進プロジェクトリーダー）の呼びかけに応じた1年生と2年生であった。土曜日は高等学校の授業があるため、初日は大学生だけが調査を担当し、高校生は2日目に調査に加わった。鹿児島中央駅構内の改札外の待合スペースと通路、枕崎市へ向かう特急バスの乗降所で調査を実施した。大学生は4名とも前年に九州運輸局の同様の調査を経験しており、初日の調査はスムーズに進み72件の回答を得た。

2日目は鹿児島中央駅に9:00に集合し、全体的な注意事項を浅岡と高等学校の教員が述べ、全員の自己紹介を行った。その後、大学生1名と高校生1名、あるいは2名のグループに分かれ、グループ単位で大学生が具体的な調査方法や留意事項、調査の要点を説明した。7名の高校生は、今回の調査に自主的に参加しており、最初から観光客への声掛けをためらうことなく、大学生が驚くほどであった。昼食は2グループずつに分かれて取り、そこでは好きなタレントから高校生活、大学での学びについて会話が行われたという。14:00まで調査を実施し、調査協力の依頼文書は、ほぼすべてを配布し総え192件の回答を得た<sup>12</sup>。

最後に、高校生に感想を求めたところ「忙しいからなのか、近寄ってほしくないことをジェスチャーで示す人がいて悲しい気持ちになったが、多くの観光客は優しく接してくれた。自分

もティッシュ配りの方などには優しく接しようと思った」「知らない人に声を掛けることに慣れ、どのようにすると話を聞いてくれるのか工夫した」「大学生が親切にいろいろとサポートしてくれ、大学生は大人だと感じた」「遠方から多くの観光客が訪れていることに、鹿児島が観光地であることを認識した」「鹿児島市以外の指宿や枕崎、霧島に多くの観光客が足を運んでくれるようになるといいと思った」などが挙げられた。

指宿市での調査は、指宿駅構内及び周辺と砂むし温泉の施設内及び周辺の2グループに分かれて実施した。指宿駅では1日目5名（大学生4名・高校生1名）、2日目6名（大学生3名・高校生3名）が、砂むし温泉では1日目10名（大学生3名・高校生7名）、2日目7名（大学生4名・高校生3名）が調査を実施した。なお、2日目の調査では観光客の数が明らかに少なかったため、前掲の2地点から大学生1名ずつ計2名（いずれも3年生）を減員し、その2名と坂本が予備地点として想定していたJR日本最南端の駅（西大山駅）にて追加調査を実施した。なお、この2名は昨年度も九州運輸局の同様の調査を経験している。

高校生は、高等学校の教員（進路指導部）の呼びかけに応じた1年生と2年生の14名が2日間の調査のいずれかに参加する形となった。高校生には事前に希望する調査地点を確認し、それに応じて担当地点を配置した。調査当日、高校生は12:30に集合し<sup>13</sup>、まずは坂本から全体説明（調査の目的や注意事項等）を受けた後、大学生を含めた小グループに分かれて自己紹介を行い、大学生から具体的な調査方法や留意点の指導を受けて調査を行った（図6）。最初は見知らぬ観光客への声掛けに戸惑う姿も見られた高校生であったが、慣れてくると大学生も顔負けの勢いで声掛けができるようになっていた。14:00までの短い時間ではあったが1日目は96件、2日目は59件の回答を得た<sup>12</sup>。





図6 大学生(左)の説明に聞き入る高校生(右)

調査終了後、高校生に感想を聞いたところ「恥ずかしかったけれど大学生がついてくれたので安心した」「(高校の) ジャージを着ていると逆に地元の人が寄ってきてくれて嬉しかった」「観光客が意外と多くて驚いた」「大変だったけど良い経験ができた」などの声が挙がった。さらには、「調査結果はいつわかるんですか?」「データを一緒に分析したりできるんですか?」「自分たちも“温泉”をテーマに研究しているので参考にしたい」といった積極的な発言まで飛び交った。

#### 4. 高大接続探究学習に関する課題と展望

冒頭で述べたとおり、「高大接続」は平成27(2015)年度から、「総合的な探究の時間」は令和元年(2019)年度から本格化したと捉えられる。その背景には、教えるから学ぶへの教授学習パラダイムの転換—アクティブラーニング—が深くかかわっているように捉えられる。溝上(2014)は、アクティブラーニングの発祥である米国において、今から半世紀以上前の1960年代に専門家と研究者の育成に偏ってしまった大学教育を学生の学びと成長に戻そうという動きがあったと歴史的背景を説明している。加えて、もっと直接的な要因として「高等教育の大衆化、それによる学生の多様化、異なる動機、希薄な目的意識、結果としての教育の困難化」を挙げ

ている〔16〕。

我が国においても米国と同様に1970年代にかけて高等教育が大衆化を遂げており、パラダイム転換が求められるようになった。その背景には、情報化やグローバル化の到来を目前に大学が大きく変わらなければならない時代にあったこと、また、大学入学者が高度経済成長によって豊かな環境で育ってきたこと、成績や受験のための受動的教育を受けてきたことなどさまざまな要因が考えられる。そうしたなかで、時代とともに用語は変化しつつも「能動的／積極的／主体的」な「学習／学び」が半世紀以上にわたり現在に至っても重要かつ必要とされているのである。

これまで流通科学部では、教員が高等学校を訪問して出張講義や出前講義を行い、また、オープン・キャンパスでは、教員による模擬授業や大学生によるゼミ紹介、教員や大学生による高校生との面談などを行っていた。これらは大学や学部、大学での学びの紹介とといったいわば高等学校を主体とした進路指導(進学)の取組に対して大学が支援するという形の「高大“連携”」に位置づけられると捉えられる。しかしながら、近年の「高大“接続”」では、高等学校と大学の両者が主体となって、高校教育と大学教育の中身を上手く接続することが求められている。つまり、高校生を大学生へといかにトランジションさせるかの視点で教育・成長を“繋ぐ”ための高大協働教育が求められていると言えよう。

本稿で記した3件の取組は本学部における、従来の「高大連携」ではない、探究を意図した初めての「高大接続」の事例と言えるのではなからうか。3件の取組では、いずれも短い時間の中で高校生が期待以上に円滑かつ積極的に活動している様子がうかがえる。これは3つの取組が高校生にとって、高校で学んだことが活用できる場、背伸びすれば手が届く未知なる知識への興味をかきたてる内容になっていたと捉え

することもできる。ここに高大接続の「トランジション」機能への示唆がある。

しかしながら、我々は高大接続探究学習を十分に理解したうえで取り組んだわけではなかった。「まずは経験」という気持ちで実施したものであり、高大接続探究学習の試みは始まったばかりである。

(3)の取組において、高等学校を事前訪問した際に教諭から「高校生は調査に参加することで、どのような成果が得られるのか」と質問を受けた。我々は、地域への関心、調査中にはコミュニケーション能力、責任感、また、最後のディスカッションでは、考える力や表現力などに関連する力の育成と回答したが、今後は学力の3要素を考慮し、図1が示す探究学習に取り組む、高大接続探究学習や大学での学びに対する期待を喚起できるように努めなければならない。つまり、「資質・能力」の三つの柱①何を理解しているか何ができるか：知識・技能、②理解していること・できることをどう使うか：思考力・判断力・表現力等、③どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか：学びに向かう力・人間性等一を総合的に捉えて、高大接続のあり方を検討する必要がある。そしてさらには、その目標に対応した評価のあり方と評価結果を活かして改善を図る取組までを含めて、取組全体の質的向上を図っていくことも課題であろう。

また、今回の取組を通じて、高等学校と大学の地理的隔たり、時間的制約の解決も高大接続の大きな課題であることを認識した。高等学校は、我々が考える以上に多くの学校行事を抱えており、高等学校の教諭や高校生は多忙である。大学入学共通テストでは従来の知識の理解や記憶力を問うものから思考、判断力や創造力を問うものへと出題が変わり、探究学習は、これらに対応すると言われているものの、実際は受験に直結する学習の時間が優先され、高大接続探究学習を実施することの困難も生じるだろう。

今回のような取組の経験を蓄積し、改善を重ねることで、単発の取組であっても高等学校や高校生が何らかの成果を得られるように流通科学部の高大接続探究学習を質、量ともに向上させる必要があることは言うまでもない。

## 5. むすびに

高大接続探究学習では高等学校での学びと大学での学びをいかに接続するかが問われる。初等・中等教育における「能動的／積極的／主体的学習」は高等教育におけるアクティブラーニングの源泉である。よって、探究学習においては、比較的自由度の高い、大学のゼミとの親和性が高く、より効果的な連携が期待できると考えられる。高校生は知識・技能・思考力・判断力・表現力等を身につけた大学生の姿を大学で学ぶロールモデルとして捉えることで学びに向かう力・人間性を育むことができるであろうし、大学生には高校生をサポートするという「能動的な学習活動への関与」と「そこで生じる認知プロセスの外化」[16]によって、自らの学びを深めるというアクティブラーニングの効果がもたらされるであろう。

今回の取組において、大学生はワークショップの運営や調査の実施というフィールドで汎用的技能を大いに発揮したが、高校生に教えること・高校生とともに学ぶことを通じて自らも新たな気づきや省察の機会を得たに違いない。その学びを終わらせることなく、次のより発展的な学習への動機づけに活かし、継続させるための教育的仕掛けを創ることが我々教員には求められる。

今回、高校生をサポートした大学2、3年生は、初等・中等教育において本格的な探究学習を経験していない。ワークショップのアンケート調査から得られた参加目的からも、「自身の探究学習をさらに深めるため」「本学の高大接続探究学習ワークショップへの興味・関心」を挙げた高校生は多くなかった。一方、調査に協

力した鹿児島純心女子高等学校・指宿高等学校では、「総合的な探究の時間」の学習において、市内電車の乗降方法を観光客に知らせる掲示の作成や特産品のお茶を使った商品開発、地域資源である温泉の活かし方などに取り組んでいる。彼らのなかには大学入学後もこのような学習を継続したいと望んでいる者も多いという。今後、高等学校で高大接続探究学習、あるいは探究学習を経験し、一定の学習成果をあげ、さらに知的好奇心を高めて大学へと進学する高校生が増えることを想定すると、高大接続探究学習はますます加速化されると同時に内容の洗練、より深い学びへの期待が求められるであろう。今回の取組では、実際に高等学校の教諭と大学教員がつながる機会を得ることができたが、今後は、高等学校と大学の学習に関してもより接続性を高められるよう引き続き協働を重ねたい。

今回の取組は、鹿児島純心女子高等学校の末吉勝也先生（21世紀型教育推進プロジェクトリーダー）、鹿児島県立指宿高等学校の堤裕之先生（進路指導部主任）、両校の高校生、国土交通省九州運輸局、本学の入試広報部の多大なご協力により実践ができた。ここに記して、感謝の意を表す。

**【参考・引用文献】** 各ホームページに関しては、2022年1月10日に確認

- [1] 先崎卓歩 (2010) 「高大接続政策の変遷」『公共政策学 年報』Vol.4 pp.59-89
- [2] 足立寛 (2003) 『Between』2003年6月号  
<https://berd.benesse.jp/berd/center/open/dai/between/2003/06/bet19529.html>
- [3] 中央教育審議会 (1999) 「第4章 初等中等教育と高等教育との接続の改善のための連携の在り方」『初等中等教育と高等教育との接続の改善について』(答申)  
[https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chuuou/toushin/991201e.htm](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chuuou/toushin/991201e.htm)
- [4] 秋田大学 カリキュラム・トランジション・センター  
<https://www.akita-u.ac.jp/ctc/gp/>
- [5] 朝日新聞 Edu A 「「探究」で高大接続」51号  
<https://www.asahi.com/edua/article/14436052>
- [6] 文部科学省 (2021) 大学入試のあり方に関する検討会議 (第28回) 配布資料【「参考資料2-2」大学入学者選抜関連基礎資料集 第2分冊 (高大接続改革の経緯等関係)】  
[https://www.mext.go.jp/content/20210629-mxt\\_daigaku02-000016365\\_5\\_1.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20210629-mxt_daigaku02-000016365_5_1.pdf)
- [7] 中央教育審議会 (2014) 「新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体的改革について～すべての若者が夢や目標を芽吹かせ、未来に花開かせるために～」  
[https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/\\_icsFiles/afieldfile/2015/01/14/1354191.pdf](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/_icsFiles/afieldfile/2015/01/14/1354191.pdf)
- [8] 文部科学省 教育課程部会 (2018) 資料「総合的な学習の時間の成果と課題について」  
[https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo3/004/siryu/\\_icsFiles/afieldfile/2018/10/10/1409925\\_4.pdf](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/004/siryu/_icsFiles/afieldfile/2018/10/10/1409925_4.pdf)
- [9] 中央教育審議会 (1996) 「21世紀を展望した我が国の教育の在り方について」(第一次答申)  
[https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chuuou/toushin/960701.htm](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chuuou/toushin/960701.htm)
- [10] 文部科学省 教育課程審議会 (1998)  
[https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo3/005/gijiroku/03070201/004.htm#2](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/005/gijiroku/03070201/004.htm#2)
- [11] 文部科学省 高等学校学習指導要領 (1999年3月)  
[https://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/cs/1320147.htm](https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/cs/1320147.htm)
- [12] 中央教育審議会 (2008) 「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について」(答申)  
[https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/\\_icsFiles/afieldfile/2009/05/12/1216828\\_1.pdf](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/_icsFiles/afieldfile/2009/05/12/1216828_1.pdf)
- [13] 中央教育審議会 (2016) 「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について」(答申)  
[https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1380731.htm](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1380731.htm)

- [14] 文部科学省 高等学校学習指導要領 (2018年3月)  
[https://www.mext.go.jp/content/1384661\\_6\\_1\\_3.pdf](https://www.mext.go.jp/content/1384661_6_1_3.pdf)
- [15] 文部科学省 高等学校学習指導要領 (2018年告示) 解説  
[https://www.mext.go.jp/content/1407196\\_21\\_1\\_1\\_2.pdf](https://www.mext.go.jp/content/1407196_21_1_1_2.pdf)
- [16] 溝上慎一 (2014) 『アクティブラーニングと教授学習パラダイムの転換』東信堂 pp.3-65

本研究では「高等学校」「高校生」「大学生」「ゼミ生」という表記を基本とした。ただし、引用元が「生徒」「学生」などになっている場合、また、他の表記についても引用は原文に従った。

1 第4章には、基本的な考え方として、以下が述べられている。

初等中等教育と高等教育の接続を考えるに当たっては、とかく入学者選抜に焦点が当たりがちである。しかし、高等学校卒業者の約7割が何らかの形の高等教育を受けている状況の下で、これまでのようにいかに選抜するかという視点よりもむしろ、学生がいかに自らの能力・意欲・関心に合った高等教育機関を選択するか、あるいは、大学が求める学生を見いだすか、特に、今後はいかに高校教育から高等教育に円滑に移行させていくかという観点から、接続の問題を考えるべきであって、入学者選抜の問題だけではなく、カリキュラムや教育方法などを含め、全体の接続を考えていくことが必要であり、初等中等教育から高等教育までそれぞれが果たすべき役割を踏まえて、一貫した考え方で改革を進めていくという視点が重要である。その際、重要なことは、高等学校以下の教育の問題あるいは大学入試の問題といういずれか一面のみから論ずるのでなく、初等中等教育と高等教育がそれぞれ独自の目的や役割を有していることを踏まえつつ、高等学校と大学の両者がいかにしてそれぞれの責任を果たしていくかという観点から検討を行うべきである。その上で、学生が高校教育から大学教育へ円滑に移行できるよう、両者の教育上の連携を拡大するとともに入学者選抜の在り方を改善することが重要である〔3〕。

2 「流通科学部におけるカリキュラム研究：学生満足度の向上に向けて」(令和元年度～令和3年度 研究代表者： 福沢健)

3 原文は「我々は、これからの子供たちに必要となるのは、いかに社会が変化しようと、自分で課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する資質や能力であり、また、自らを律しつつ、他人とともに協調し、他人を思いやる心や感動する心など、豊かな人間性であると考えた。たくましく生きるための健康や体力が不可欠であることは言うまでもない。我々は、こうした資質や能力を、変化の激しいこれからの社会を〔生きる力〕と称することとし、これらをバランスよくはぐくんでいくことが重要であると考えた。」である〔9〕。

4 以下の内容が目標とされた〔14〕。

探究の見方・考え方を働かせ、横断的・総合的な学習を行うことを通して、自己の在り方生き方を考えながら、よりよく課題を発見し解決していくための資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

(1) 探究の過程において、課題の発見と解決に必要な知識及び技能を身に付け、課題に関わる概念を形成し、探究の意義や価値を理解するようにする。

(2) 実社会や実生活と自己との関わりから問いを見だし、自分で課題を立て、情報を集め、整理・分析して、まとめ・表現することができるようにする。

(3) 探究に主体的・協働的に取り組むとともに、互いのよさを生かしながら、新たな価値を創造し、よりよい社会を実現しようとする態度を養う。

5 ワークショップ延期後の高校生の参加予定人数は34名であった。参加人数が減少した主な要因として、令和3(2021)年6月17日付で決定した福岡市に対するまん延防止等重点措置の実施期間が、令和3(2021)年6月21日からワークショップ当日の7月11日までであったことが挙げられる。

6 図2、図4、図6は、高校生、大学生から掲載許可を受け、本学ホームページに掲載された写真を使用した。

7 24名中1名が「満足」と「やや満足」の両方を選択した。

8 「自身の探究学習をさらに深めるため」を選択した高校生は「トレンドはどこからきているのか」「新型コロナウイルスによる経済状況」「時代に合った『食』の在り方」「日本マクドナルド株式会社について」のテーマに取り組んで

- いた（令和3（2021）年7月時点）。また、「その他」には「経済について興味があったため」「経営について考えてみたかったため」「所属高校で受講した探究学習をより深めるため」といった目的が挙げられた。
- 9 サービス・ブループリントとは、顧客が入店してから退店するまでのサービスのプロセスを①顧客の行動、②顧客が見聞きし接触する環境要因、③顧客に対応するフロントヤードの従業員の行動、④バックヤードの従業員の行動やサービスシステムに分けて整理、分析する手法である。
  - 10 「調べる、考える、交流する、表現する、振り返る」という5ステップを重視している。
  - 11 本稿に記した鹿児島市内、指宿市内における大学生と高校生による調査のほか、指宿市内と枕崎市内の宿泊施設における留置調査も実施した。
  - 12 時間のない観光客にはQRコードを記した依頼文書を配布して後日の回答を可能としたため、2日目の回答件数には1日目に配布した観光客の回答者が含まれる可能性がある。最終的な回答件数は、鹿児島市内311件、指宿市内166件であった。
  - 13 1日目、2日目ともに調査地点までは高等学校の教諭1名が引率を担ってくれた。